

障害のある個人の当事者参画による「できる」の拡大

Enhancing individuals' "Dekiru" who have disabilities in the supported decision making

鳥取直子・高山仁志・朝野 浩・土田菜穂・中鹿直樹

Tottori Naoko, Takayama Hitoshi, Tsutida Naho, Asano Hiroshi & Nakashika Naoki

立命館大学

Ritsumeikan University

Key words: 学生ジョブコーチ 援助付き「できる」 当事者参画

目的

立命館大学では、障害のある生徒や成人を対象に、学生ジョブコーチ（以下、SJC）による対人援助実践を行っており（望月他，2010），その一環として大学内に設置された模擬喫茶店舗での実習を行っている。模擬喫茶店舗では、業務を遂行する支援だけでなく、実習参加者が自ら進んでできることを拡大するための支援が行われている（中鹿，印刷中）。本研究では、障害のある個人が自ら実習内容を決定し，その中から当事者の「できる」を拡大していくことを目的とした。

事例

対象者 支援学校高等部1年生の男子生徒Aであった。

期間 2017年X月Y日～Y+3日の連続する計4日間。

場面 大学内に設けられた模擬喫茶店舗を使用した。対象者はこの店舗の店員として，SJC（筆者）が店長として実習に参加した。

業務内容 業務内容は，毎日行う基本業務（接客，厨房，会計）及び，対象生徒が「<する><しない>」を選択できる選択業務（お菓子準備，飲み物を作る練習，洗剤，モップかけ）であった。

方法 実習1日目は，基本業務及びすべての選択業務を行うよう，SJCがスケジュールを決定した。実習2日目より，午前・午後の業務開始前に，対象生徒が選択業務の選択を行う機会を設定し，選択した業務を実行した。業務遂行に際しては，それぞれの業務に手順書を作成した。実習中，SJCはカフェ業務を遂行する上で，適応的な行動には賞賛を行い，その内手順書に記されていない行動を対象者の「できる」として記録した。

実習結果

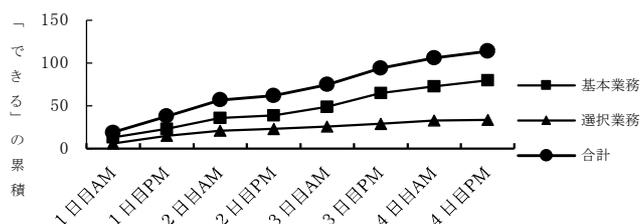


図1 実習中における「できる」の総数

実習2日目以降，対象生徒は選択業務の選択および，

その業務を実行することができた。SJCが決定した基本業務，対象生徒が決定した選択業務いずれの業務においても対象生徒の「できる」は拡大した。実習業務以外での行動の拡大も見られ，実習中の昼食では今まで外で食べたことのないものを注文して食べたり，自宅で喫茶メニューの一つを（援助つきで）作成したりすることもあった。

追加の援助設定 対象生徒の「できる」は拡大しながらも，業務の途中で業務から離脱する（30秒以上業務から離れる，もしくは次の工程に移れない）ことがあったため，3日目午後より一つの業務が終了するごとに，「<仕事をする>」か「<休けいをする>」かを対象生徒が選択できる機会を設定した。「<仕事をする>」を選択した場合には業務を続行し，「<休けいをする>」を選択した場合には，業務用の帽子を脱ぎ，休けい用のイスに座るよう教示した。休けい時間は対象生徒に決定させた。

追加の援助設定の結果 対象生徒は，SJCの教示に対し，「<仕事をする><休けいをする>」のどちらかを選択することができた。追加の援助設定導入後，業務中の離脱時間が減少した。

考察

障害のある生徒に対するこのような実習では，支援者側がその内容を決定することが多い。しかし本研究では，対象生徒自らが決定した業務においても「できる」が拡大した。また支援者が，対象生徒の離脱を自主的な休憩であると行動の見方を変えることで援助設定を追加でき，「<休けいをする>」という新たな選択肢を作り出すことができた。

「できる」は，当事者と支援者の相互関係から作り出される。支援者が当事者の今ある行動の見方を変え，当事者の行動を待ち，認めていくことで，当事者の「できる」はさらに拡大していくであろう。

参考文献

望月昭（2007）学生ジョブコーチという試みー学生による障害者（生徒）の就労実習支援システムー，立命館文学，599，134-140
中鹿直樹（印刷中）大学内模擬喫茶店舗における障害のある生徒のキャリア支援，人間科学研究。